

国際教育研究フロンティアB 2008年度 「中国における教育課程改革の現状と課題」

1. 概要

8月に行われた2008年度センター企画の「日中韓の教育改革・教育評価改革の動向」に引き続き、中国・中央教育科学研究所の高峽先生による集中講義が行われた。

高峽先生は日本の大学への留学経験があり、中国では社会科の教育課程改革や教科書の編集に携わっておられる。昨年度、日中教育共同研究センターの企画等でも何度か来日された。

集中講義では、中国の教育課程改革が主に扱われた。先生が日本語に堪能なこともあり、授業はすべて日本語で行われた。

2. 中国の教育課程改革

中国の教育課程改革に関しては、以下の二点を中心に講義が行われた。



一点目は、学力観の転換である。それまでの知識の再生のみを重視する学力観は、知識の活用や学習の過程を重視する学力観へと転換した。また子どもの生活経験や学習経験も考慮の対象になった。

二点目は、教科の再編である。特徴的なのは、複数の教科を統合する教科が新設されたことであり、社会科学の分野を統合した教科や芸術分野を統合した教科の紹介がなされた。

高峽先生によれば、中国の教育課程改革は外国の教育課程から大きな影響を受けている。日本の社会科や総合学習もそのうちのひとつである。

3. 中国の教育問題

中国の教育課程改革にあわせて、中国の教育問題に言及がなされた。興味深かったのは、高峽先生が教育学者という立場からだけではなく、保護者という立場からも教育問題を論じられたことである。

中国の教育問題は、教育課程改革に伴う授業観・学力観の転換と受験競争の過熱に原因があるようだ。

教師たちは新しい学力観に基づいた授業を行うために、授業以外の時間もその対応に追われている。子どもたちも新しい学力観についていけなかったり、受験競争に伴う塾通いによって精神的に抑圧されたりしている。

高峽先生からは、子どもの宿題が難しすぎるので自分が手伝っていることがある、塾通いに疲れた子どもが授業参観で「おとうさんとおかあさんは私を愛していない」と述べたといったエピソードが紹介された。



4. 授業検討会

集中講義では、実際の授業の様子を収めたDVDを鑑賞し、全員で授業検討会を行った。



DVDからは、子どもの動機や生活経験の重視、問題解決の過程を丁寧におさえるといった新しい学力観に基づく授業の様子を見取ることができた。また授業の内容だけではなく、子どもの手の挙げ方といった学校文化の違いにも話が及んだ。

(文責：徳永 俊太)